言語研究センター創立20周年に思う：

「国際言語研究センター」の構想

伊　藤　克　敏

今年で，当センターが20周年を迎えたことは誠に慶賀すべきことである。「外国語研究センター」時代は主として全学の語学教育に力点が置かれてきた。筆者の任期中に，「言語研究センター」と名称を改め，隣接科学や文学も含めた言語の総合的な研究とその応用としての言語教育の二本立てにし，更に，外国語研究大会や語学教養講座を開催したりして学外に開かれたセンターのあり方を模索したのである。また，外国から学者を招待して講演会を開いたりし，活動の規模の拡大を図ってきた。

現代の言語学は拡散化時代といわれ，言語の内部構造の研究と同時に神経学，心理学，人類学，哲学，など広い人間学に深く結び付いている。従って，言語学と言語教育とは不即不離の関係にあると言わざるを得ない。このことから，言語研究は言語そのものの研究と，謂わば，応用言語学としての母語教育や外国語教育を含む言語教育を包含すると言うのが現代的な見方であろう。

言語の理論的研究も大切ではあるが，既に述べたように，他の隣接諸科学との関連や，応用言語学としての言語教育と言った幅広い研究を目指すべきであろう。差し当たり，言語科学部門と応用言語学部門の二つに分け，各々が独立した体制を取りながら，随時情報交換をし合うことも必要であろう。

最新の研究情報を世界各地から集めるために，外国から研究者を招聘し，客員研究員として所員と共同研究をしたり，また研究所や大学院で講義をしてもらう。このようにして，本邦でもユニークな「国際言語研究センター」の実現を目指すのである。

最近の事務体制の弱体化は誠に嘆かわしく，大学側にこれからの構想

をアピールし，事務体制の強化とともに，技術員を導入し，LLの一層の幅広い活用を目指す必要があろう。帰国子女や社会人の語学教育も今後の社会に開かれた大学の一環としてのセンターのあり方を真剣に考えて行くべきであろう。

arm-chair linguistics（机上言語学）と呼ばれる狭義の言語学研究だけに終始することは全学的な言語研究と言語教育研究を推進しようとする言語研究センターには必要ないのである。人間学，人間教育学を目指す総合的な言語研究を志向する「国際言語研究センター」の設立こそこれからの時代の要請に合致するものである。

最後に，一つ提案をして置きたい。それは，当センターに研究員制度を導入することである。これは以前から構想として運営委員会で話し合いに出されてきたことである。即ち，研究員は年間2，3名とし，希望者は「研究テーマと構想」をセンターに提出し，選考される。選ばれた研究員は1－2年間は担当コマ数は最少限にし，研究に没頭でき，研究期間が終ったら研究報告を提出する。勿論，相当の研究助成金が支給される。こういった研究員制度を導入することは本学の言語（教育）研究の質的向上に貢献するであろう。